

## 第二分科会「少子化対策」

### 第1部

これより第二分科会 少子化対策 第1部を始めさせていただきます。私は、本日の第二分科会の司会進行役を務めます、千葉県市町村課の林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。事例発表の後、質疑応答の時間を設ける予定です。

オンライン参加の方もご質問いただけますので、質問のある方は、質疑応答時に、画面下の Q&A ボタンでの質問の入力をお願いいたします。なお、時間の都合上、全ての質問にお答えすることはできませんので、ご了承ください。また、ご質問に関しては、会場からいただいたものを優先させていただきます。

ここで登壇されている方々をご紹介します。皆様から向かって右側、岡山県奈義町長 奥 正親様より事例をご発表いただきます。続きまして、皆様から向かって中央、高知県安芸市長 横山 幾夫様より事例をご発表いただきます。そして今回、コーディネーターを務めていただくのは、学習院大学文学部教授・東京大学名誉教授 秋田 喜代美様です。

ここで秋田様のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。秋田様の専門は教育心理学、学校教育学、保育学で、教育学博士です。現在、こども家庭庁こども家庭審議会会長。文部科学省中央教育審議会教員養成部会長。同教育課程副部会長を務められております。また、日本保育学会第7代・第9代会長を歴任され、著書には「保育の心もち」などがございます。これより先の進行役は秋田様にお願いしたいと存じます。秋田様、よろしくお願いいたします。

### 学習院大学文学部教授、東京大学名誉教授

#### 秋田 喜代美

はい。林様、ご紹介ありがとうございます。皆様こんにちは。はい。ありがとうございます。学習院大学の秋田でございます。これから皆様と一緒にな少子化について、一緒に考えてまいりたいと思います。

今日は前半の1部も、後半の2部も大変魅力的な自治体の取組を、ご報告いただける予定になっており、先ほどもお話がございましたように、私がイントロを話させていただき、それぞれの首長様からお話をいただきました後、ぜひフロアの皆様も全員参加の気持ちで、ご質問などを挙手をしていってくださいとありがたいと思っています。これからの少子化について、一緒に考えてまいりたいと思うところでございます。

それではまず、簡単にではございますが、もう当たり前かもしれませんが、

(1 頁)

私の方でプレゼンの資料を少し今日の少子化というところに対応して、出させていただきます。

(2 頁)

今こちら、皆様の方に出て、見ていただけているものは、皆様のお手元にも、見えているかと思いますが、どんどんこの人口が減少していくというのはもう皆さん言うまでもないことでございますが、私どもは、これまでに考えたこともないような少子化の状況を迎えているというところです。

(3 頁)

特に大きな問題として見ていただきますと、先ほどの庄司先生のお話にもありますが、年代的に見ても、当然、生産年齢も減っていきませんが、小さい方の年齢から順に大きく減ってきているというような様子がこの 2020 年から 2040 年へ、緑から赤の予測で、それぞれの段階で減っていくということがお分かりいただけるのではないかと考えております。

(4 頁)

そして、少子化は子どもが減ることだけではなく、当然その将来を担う子どもたちと同時に、現在その子どもの働き手、親である生産年齢人口の方々も、またその町や市からいなくなれば減っていくというようなことになります。その生産年齢人口が減っていくというようなところも、大変大きな問題である。少子化は子どもの数の問題だけではなく、まさに社会全体の活力の問題と考えることができます。そして少子化の問題と高齢化の問題も、また非常にサイクルとして繋がっているところで、国の方でも私はあの全世代型社会保障の構築会議のメンバーでございますが、あらゆる委員がやはり、少子化の問題を今一番克服しなければならないということで、我が国ではスウェーデンと並んで子ども予算がこども家庭庁によってつけられるというようになっております。一番高いと、OECD 先進ショックで言われているスウェーデンと子どもに国が投資しているお金の比率というのは、もう同じような状況までできています。

(5 頁)

しかしながら見ていただくと、これが過疎と言われる地域の分布になっておりますが、ここにご参加の皆様も本当に切実な問題と考えられているのではと思います。

(6 頁)

そうした中で、我が国だけが少子化なのではありません。先進諸国は国際的にも多くの国でこのような形で、人口が減っています。少しフランスやフィンランドの施策がうまくいっていると言われた時期もありますが、減ってきております。ドイツが増えてき

ているのは、移民を受け入れることで子どもの数が増えてきている。日本はまだ 1.26、1.3 ですが、皆様ご存知のように、韓国は最も少なく、アジアの国々では、香港、シンガポール、台湾等も減ってきている。

実は、1 を切っている東アジアの国と日本はどこが違うのかご存知でしょうか。専門家の先生方のお話を伺いますと、まだ日本の若者は結婚はしたいと思っている。ところが例えば韓国等ではもう非婚宣言といいますか、結婚そのものへの希望というようなところが若者の中になくなってきているということが生まれているのだそうです。ベビーカーの代わりにペットを乗せる車の方がよく売れているというような状況まで生まれてきている。

しかしながら、少子化、子どもの問題というのは我が国の希望を作り出すものでございます。各地域です。国は大きな施策を今次々打っています。子どもの権利の保障ということも謳っていますが、やはり大きな国だけではできない目の前の、それぞれの住民の方の地域の文脈や文化に合った施策をどのように自治体が打っていくのかというところで、これから順にお話を 2 自治体について伺い、その後皆様と対話をしてまいりたいと思います。それでは最初に奈義町長からお願いいたします。

**岡山県奈義町長  
奥 正親**

(1 頁、2 頁)

それでは、奈義町の少子化対策、子育て支援の取組の事例発表をさせていただきます。まず奈義町ですが、中国山地のど真ん中であり、過疎の町です。

(3 頁)

地図の左上に、岡山県の地図がありますが、北東部、一番北の東の端です。国道 53 号が鳥取市と岡山市を結んでいますが、岡山から鳥取に行くと、県境の町ということで、岡山県最後の町でございます。昭和 30 年に合併をしまして、人口 9,000 人からスタートしています。特別なことは、平成 14 年、合併から 47、8 年、約 50 年後に平成 14 年です、平成の大合併が始まりましたが、このとき、合併をしないということで、住民投票で町の方針が決められました。投票率が 75%、合併をしないという意見が 70%ということで、半数以上の町民の方が合併をしないという選択をされました。面積は約 70 平方キロ、人口が現在 5,560 人ということで、約 70 年で、3 分の 2 以下に減っているという状況です。大きな町の特色は、陸上自衛隊の日本原駐屯地、そして演習場を抱えていることです。演習場が約 12 平方キロ、町の面積の 5 分の 1 が演習場ということです。

(4 頁)

次が町の状況ですが、先ほど言いました中国山地のど真ん中なので、国定公園に指定されました奈義山が左上に見えますが、その南山麓に広がる標高 200m の町です。主な文化、特色は左下にあります、地歌舞伎、農村歌舞伎が残っていることと、右側は現代

美術館です。6,000 人の小さな町ですが、現代美術館を擁しているところが特徴的だと思います。

(5 頁)

それから、子育て関連施設ということで、今年度からこども園が開設されました。保育園 1 園、幼稚園 2 園を統合し、こども園になり、現在 230 名を超える子どもたちを預かっています。小学校が 1 校、中学校が 1 校ということで、中学校はこの 11 月中旬には、完成するということで、耐震基準に合わなかったものをやっとな子どもたちが安心して、学校で勉強できる環境が整うということになります。

それから一番下ですが、チャイルドホームという施設があり、これはこども園に行かずに、家で家庭保育をされる皆さんが集える場所ということで用意をしています。昔は地域の中に子育てのコミュニティがありましたが、今、中国山地のど真ん中の過疎の町でも、そういうコミュニティがなくなっているため、用意をしています。

(6 頁)

一つ地域に魅力をつけるために若者の支援もしていますが、魅力ある教育をしようということで、その中で子どもたちのコミュニケーション能力を図っていくものです。こども園、小学校、中学校、一貫教育の中で取組をしています。特に今年から、英語指導助手を各学年に 1 人ずつ入れています。3 歳児から中学校を卒業するまで、各学年約 50 人ですが、それぞれに 1 人ずつ入れているというのが特徴的だと思います。

(7 頁)

町の将来人口推計ですが、2015 年の国勢調査では、5,906 人ということです。1955 年に合併をし、60 年かかって 3 分の 2 に減りました。これから 2025 年です、ほぼ一番近いところですが、5,096 人、5,137 人ということで、この下のグラフは、一番下が社人研の推計です。それからその上の青のラインが、社人研の数字に出生率 2.3 で加えた推計です。そう変わらないですが、一番上の黄色のラインで、これは、出生率 2.3 で社会増減を±0 にしたときの推計です。我々は出生率 2.3 に持ち上げて、社会増減を±0 にしようと考えています。そうすると、将来約 5,000 人で町が続いていくのではないかとということで推計が出ており、これを目標にやっています。

先ほど言いましたように、合併をしない選択をしているため、人口がどんどん減ると、奈義町を残していくことができなくなるため、もう後がない取組を今しているところです。

(8 頁)

平成 24 年、今から 12 年前に、子育て応援宣言をしました。その結果、高い出生率が小さい町なので、高い出生率のときと、そうでないときとあります。令和 4 年からいうと、過去 5 年間の数字を大体平均すると、52 人です。過去 10 年間、令和 4 年から遡ると、51.3 人ということで、過去 5 年の方が出生者数が多いということになっています。

ということで町のまちづくりの中に子育て支援ということで取り組んでいるところでございます。

(9 頁)

町の課題と目標ということですが、先ほど言いましたように人口減少、少子高齢化ということで、町が続いていくかどうかということが大きな問題です。そのために今の人口維持をしようということで考えています。その方策が子育て支援、そして住宅施策、魅力ある教育、就労の場の確保ということですが、若い人が町に魅力を感じてくれないと残ってくれません。外からもやってきてくれません。ということで、若い人が町で活躍できる、楽しく過ごす魅力を感じるまちづくりが必要だということで、その大きなものが子育て支援の施策です。

(10 頁)

子育て支援の施策の中で、子育て応援宣言をさせていただきました。これは、町民の皆さんにこれからも町長が変わってもずっと、奈義町としては、子育てを応援すること、町民の皆さんに約束をし、安心感を持ってもらったということです。言うまでもなく、子どもは町の宝で、地域、家庭、そして学校、行政、みんなで子育てを応援しようということで取り組みをしています。

(11 頁)

子育て応援宣言は、少子化対策ということなのですが、少子化対策というのは、若い人だけのためではありません。一番は、最後に書いてあります、最高の高齢者福祉だということで考えています。といいますのも、6,000 人の町になりました。これから人口があと 20 年ほどすると 4,000 人、30 年ほど経つと 3,000 人を切るということで、高齢化率もどんどん上がります。高齢者の皆さんにいろいろ聞くと、やはり最後に共通されるのは、自宅で地域で最期まで暮らしたい。住み続けたいと言われるのが高齢者の皆さんの願いです。これを叶えるには、人口を維持しなければならないと思っています。

あるとき病院に行きますと、病院の跡を取れと言えませんかという話を聞きました。それはなぜかという、人口が減って、医者をして、飯を食べていけないという話であります。6,000 人ほど人口がいないと、診療所が運営できない。町にスーパーがありますが、スーパーがこれからどんどん人口が減ると運営できなくなる。町も今、200 円でサブスクで町内のみですが、乗り放題のデマンドタクシーを用意していますが、こういうものもできなくなる。高齢者の皆さんが安心して最期まで過ごすためには、やはり医療、交通、買い物ができるなど、そういうものがないといけません。

それが、人口がやはりあの周りの状況もあると思いますが、奈義町の場合は、これを維持して、高齢者の皆さんの生活を守ろうと考えています。若い人がいて、子どもがいて、高齢者を支える、この循環を町に起こしたいと切に思って、取り組みをしています。

(12 頁)

これが子育て支援の主な内容ですが、柱は経済的な支援と、もう一つが精神的な支援です。精神的な支援はここへ黒字で書いていますので、また後ほど見てもらえればと思います。

(13 頁)

経済的な支援はいろいろとやっています。町に高校がないため、高校へ通うバスの通学の補助、月に2万円です。給食費も無料化しました。当然皆さんのところもやっているとありますが、医療費も無償化にしています。学校の副教材費の無償化も取り組んでいるということで、大体、皆さんのところの良いところを見習い、できることは全てやろうということで取り組みをしています。

(14 頁)

精神的な支援の主なものが、チャイルドホームという施設で、ここは先ほど言いました、子育てのコミュニティが地域になくなりましたので、行政で用意をしています。時間は保護者の方がいつでも行って、いつでも帰れる。こども園のように保育時間は決まったものではありませんが、そういうところで高齢者の皆さんと会話ができる子どもの面倒を見てもらう。保護者の皆さんも、ストレスが発散できるとか、情報交換ができるというような取組です。

(15 頁)

もう一つが、しごとコンビニということで、社会の中で子育て中に社会と繋ぐ、社会と縁を切らないということで子どもを連れての共同内職場というイメージです。

(16 頁、17 頁)

あとは、住むところの施策、それから地域で経済を回そうということで、ナギフトカードを町民に1人1枚交付しており、これは、新型コロナの時も、これで給付金を給付をしました。

(18 頁)

最後になりましたが、子育て支援の主なものは、やはり安心感ということで、地域の中でみんなで支える子育てということに取り組んでいます。ということで子育て支援に取り組んでおります。時間が経過しましたので、ここで代わりたと思います。ありがとうございました。

**秋田さん：**奥奈義町長、ありがとうございます。さらに伺ってみたいところですが、ぜひそれはフロアの方から後ほどご質問をいただければと思います。

それでは、今度は安芸市の方にご報告をお願いしたいと思います。

高知県安芸市長  
横山幾夫

(1 頁、2 頁)

私からは、出会い、結婚に関する専門支援員、出逢いコンシェルジュによる新たな出会いの支援に関する取組について、ご説明いたします。本日はご覧の内容で本市の取組について説明をさせていただきます。

(3 頁)

初めに安芸市の概況について、ご説明をさせていただきます。本市は県庁所在地の高知市から、東部へ約 40 キロに位置する高知県東部地域の中心市です。三菱グループの礎を築いた岩崎彌太郎、そして三菱の 2 代目社長、弟の弥之助、そして彌太郎の長男の 3 代目社長、久弥の生誕地です。この久弥氏について、千葉県富里市に末廣別邸というものがあり、そこで過ごされておりましたため、現在も富里市と安芸市は交流を行っているところです。

また、こちらは野球で言えばロッテでございますが、安芸市はプロ野球の阪神タイガースのキャンプ地で、今現在秋季キャンプを行っており、交通渋滞が起きております。

令和 2 年国勢調査では、本市の人口は 1 万 6,243 人で、合計特殊出生率は 2022 年で 1.31、平均初婚年齢は男性が 29.6 歳、女性が 28.3 歳となっております。出生数につきまして、20 年前は 150 人前後でございましたが、10 年前の平成 26 年度以降、100 人を下回っており、令和 5 年度は 55 人と過去最少となりました。本市では人口の自然減が続いており、近年では毎年 250 人前後の自然減となっております。

(4 頁)

安芸市における少子化対策の現状と課題についてお話をさせていただきます。

これまで本市では、新婚世帯の住宅補助や保育料の第 2 子以降の完全無料化、高校生までの医療費無料化など、結婚から子育て支援まで切れ目なくサポートする施策に取り組んでまいりました。しかし、大小様々な少子化対策に取り組んでいるものの、その課題といたしまして、それらの施策が成果に結びついているかの因果関係が不明で、真に出生率向上に繋がるような施策に取り組んでいるのか、根拠に基づいた事業展開が十分にできているのかといった懸念が挙げられていました。

また、少子化対策に取り組む上で、庁内各部署の垣根を越えた連携体制が、十分とは言えない状況でした。そこで包括協定を締結している高知県立大学と連携し、本市にお

ける少子化の要因分析や、取組に対する学術的評価を行い、単なる思いつきではないデータに裏付けされた取組を展開するため、令和2年3月に安芸市少子化対策強化基本計画を策定しました。そして、少子化対策を検討する全庁横断的なプロジェクトチームを設置しました。

#### (5 頁)

従来から本市の課題の一つであった、全庁横断的な少子化対策を検討する推進体制として、令和3年に市職員で構成するプロジェクトチームを立ち上げ、検討を進めてまいりました。チーム員は幅広い総合的な検討を行うため、関係部署の他、独身や多子世帯など、様々なライフステージにある職員を、男女5名ずつ計10名で構成いたしました。プロジェクトチームの中で、本市の特徴や要因仮説を抽出し、対応策を検討した結果、18件の事業提案がありました。本市は婚姻数は40年間で65%減少し、令和2年国勢調査では、高知県の女性の50歳未婚率が東京都を抜いて、全国ワースト1位、その中でも安芸市の50歳時未婚率は、男女とも県の平均を上回る状況でした。

婚姻数減少と出生数の減少における相関性は明らかになっていますが、その婚姻数減少の背景には、高度経済成長期を境に、自由恋愛が増加する一方、ご近所にもいらっしゃった男女の仲を取り持つお世話焼きの方や、仲人の減少という相関性がデータに表れております。言い換えますと、お世話焼きさんがいたころは、婚姻数は多かった時代とも言えるのではないかと思います。

本市ではこの相関性に着目し、結婚に向けて背中を押してほしいと望む若者を支えてあげられる存在を復活させ、その人材が今の若者にも必要であると仮説を立て、令和版お世話焼き人として、出逢いコンシェルジュを配置しました。行政が直接個人の出会い、結婚へのサポートをするということに迷いもありましたが、自然減対策はもはや待ったなしの状況なので、全国でも先陣を切って施策に取り組むことにしました。

#### (6 頁)

出逢いコンシェルジュの配置により、出会いイベントの回数は増え、仲人としての引き合わせの件数や、交際組数も着実に増えております。具体的に上げると、恋活イベントでは、連絡先交換から交際に至った10組のうち1組は成婚待ちと伺っております。コンシェルジュの特徴として挙げられるのは、イベントを開催して終わりではなく、その後も参加者への支援を継続しており、出逢いコンシェルジュ公式LINEによるコミュニケーションのアドバイスなど、相談窓口として真摯に対応し、信頼関係を構築しながら、婚活の伴走支援を実施している点です。



そのため、イベント後に交際に発展したなどの後追いができております。仲人としての活動では、引き合わせ 19 組のうち、交際が 9 組、そのうち 1 組が成婚されております。

また町全体で出会い、結婚の機運を高めていくための取組として、子育て支援施策や地域の少子化対策を紹介するチラシを作成し、広報で全世帯に配布をしております。また各ライフステージの世代に向けた情報発信として、子育て支援情報を集約した子育て応援ポータルサイトを構築し、それと連結した LINE アカウントによるプッシュ型の情報発信や、インスタグラムの情報発信など、必要な人に必要な情報が届くよう SNS も駆使しながら取り組んでいるところです。

(7 頁)

出逢いコンシェルジュの活動風景を掲載しております。あまり時間がないようですので、後でまたじっくり見ていただければと思います。

(8 頁)

これも先ほどお話ししました、広報へ折り込んで全世帯に配布しているチラシです。

(9 頁)

これが子育て応援ポータルサイトで、令和 5 年度末、昨年より運用しており、知りたい情報にすぐにアクセスできるよう、とにかく見やすいサイトを目指して取り組んでいます。

(10 頁)

次のページは出逢いコンシェルジュ事業化にあたっての所感です。

良かった点では、従来の仲人さんは、高齢の方が多いたのですが、出逢いコンシェルジュは 50 代で、独身男女のお母さん世代だからこそ、我が子のように親身な対応ができています。普段から SNS も使いこなしているので、効果的な情報発信に取り組むことができっております。またイベント時の参加者への支援はもちろんのこと、イベント後に伴走支援を希望する方に対し、出逢いコンシェルジュ公式 LINE によるやり取りの中で、信頼関係を構築しながら婚活の伴走支援を実施することができております。

反対に事業化にあたり、苦労した点につきまして、人と人のご縁を結ぶという通常業務とは異なる性質を含んでいることや、本市の地域性を熟知していることなどに配慮しながら、人材の確保に向けて検討を進めてまいりましたが、なかなか難航し、人伝て

を頼りに地道に、かつ慎重に検討を行い、面談等で人柄を見定めながら、最終的に市内在住者の選定に至りました。

課題といたしまして、イベントに女性や市内住民が集まらないことや、少子化人口減少対策として、県外から若い女性に来てもらうことが必要ですが、1自治体だけでは参加者を引き寄せるために必要な資源が不足していることが挙げられます。これらに対して、本市だけでなく、高知県全体での取組が必要となっておりまいます。まずは、高知県東部地域を巻き込み、点から面への取組を進めることを検討しております。

(11 頁)

最後のページになりますが、今後におきまして、最終的なビジョンの達成に向けて、出逢いコンシェルジュを中心に様々な団体を巻き込みながら、各ライフステージにおいて必要な施策の分析、検証に取組、総合的な少子化対策に取り組んでまいります。以上で安芸市の取組内容の説明を終了させていただきます。ありがとうございました。

**秋田さん：**横山安芸市長様、ありがとうございます。今、奈義町長様、安芸市長様それぞれから、特色のあるものによって、明らかに我が国の合計特殊出生率よりも多くなっている自治体としての施策をお話いただきました。

これから、皆様の方でも質問をお受けしたいと思います。オンラインの方はチャットにも入れていただけたらと思いますが、まずは、それぞれ首長として、お互い違うところももちろんあるわけですが、参考になるところもあると思います。奥奈義町長さんの方から横山市長さんのお話を聞いてというところで、またその後、横山市長さんの方から奥奈義町長さんのお話を聞いてということで、口火を切っていただけたらと思います。お願いいたします。

**奥町長：**奈義町は、子育て支援ということを柱に取り組んでおります。それは少子化対策の中の若い人が残ってくださる、来てくださる中の一つの柱なのですが、名簿を見ると、結婚をされない選択の方もいます。それはそれで私はいいいと思っていますが、結婚の願望がある方にそうして、市で取り組まれているというのは、子育て支援だけでは出生率、出生数、人数は上がっていかないと思っているため、大変いい取組をされているなと思っています。

奈義町は若い人が集まって婚活のパーティーをしてくださったりということで、今、町があまり絡まないように、若い人に委託、お願いをしてやってもらっています。良い効果が出れば、本当にありがたいと思っています。

**秋田さん：**ありがとうございます。奈義町でも婚活等もやっている。それは今度はコンシェルジュではなく、若手世代に委ねながらやってもらっているってところで、今日は主に子育て支援の方の施策をお話しいただいたということです。はい。ありがとうございます。横山市長はいかがでしょう。

**横山市長：**はい。実は奈義町へ安芸市の議員が8年前に視察に行っており、安芸市も奈義市の真似ではないですが、何とか取り入れられるところはないかなということで、これまで様々な検討もしてきました。その中で安芸市の方は、職員にアンケートをとり、そういった婚活などはいろいろ今までありましたが、なかなかそういう機会がないということで、引っ込み思案ということもあるかもしれませんが、そういうことでこうなったわけですが、奈義町さんにつきまして、この人口は少ないということですが、すごい取組をされているということで、今後また、機会があればいろいろと教えていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

**秋田さん：**ありがとうございます。このような形でそれぞれに工夫がなされ、その町の規模と市で行われるものとの特徴もあろうかと思えますし、例えば高齢者が多く、先ほど奥町長からは子育て支援は最高の高齢者福祉に繋がるというようなご発言もございました。それから横山市長の方からは逆にいろいろなチームを組み、エビデンスベースで計画を逆に若手のプロジェクトチームを組織し、これからの町や市を盛り立てていく人材をどう職員の中で育ててやっていくのかということもあったと思いながら聞かせていただきました。

私の方から質問をさせていただいた後、皆様からぜひ伺いたいと思うのですが、今日この分科会の前にデジタルという話がございました。両方の市町の中にも少しご報告はあったのですが、これからDXやデジタル化というものと少子化の問題をどう繋いで施策に生かしていくのかということを、一部ご報告の中にもあったのですが、お話聞かせていただいてもよろしいでしょうか。

**奥町長：**奈義町は、子どもたちにデジタルの恩恵を一番にしてもらおうということで、文部科学省が進めていたコロナ前の子どもに1台ずつのパソコンということで、一緒に取り組み、そして教育委員会の方も一緒に活用方法をいろいろ考えてくれて取組みができています。

それから町の方は、先ほどナギフトカードということで話をさせていただきましたが、コロナのときにも、給付金をこれで皆さんに給付ができました。それまでは活性化支援券ということで、紙の券を印刷して、配っていましたが、1人1枚ナギフトカードというものを作り、生まれて出生届が提出されたらお届けするというので、1人1枚持っていますので、コロナの時の給付金も明日から給付をしようと、1人1万円ということ

で、すぐ翌日から使えるようにできました。お店も最初は給付金、デジタルでなかなか大変だとか、高齢者の皆さんがたくさん使えるのかという話もありましたが、蓋を開けてみると、高齢者の皆さんの方が利用率が高かったです。

上手にといいますか、生活に密着したところで、デジタルを使っていくと、必ず利用率上がり、高齢者の皆さんも使われるということで、カードは今有効に使ってもらっています。現在は、カードを携帯の中にナギアプリという町のアプリを入れて、情報発信もしますが、その中にナギフトカード、電子カードを入れ、それで買い物ができる。お金もチャージができるというようなこともやっています。デジタルは高齢者にとっても大変重要なことだと思います。

**秋田さん：**ありがとうございます。子育て支援だけではなく、高齢者も含めて逆に蓋を開けてみたら高齢者の方がよく使われており、生まれたときからそれがまさに町のアイデンティティといいますか、私がこの町民だという、まさにそのカードによって、様々な生活が成り立っていく、それから町独自のアプリを使いながらそういうことをやっているということです。

また、ここでも他の事例も手を挙げて伺えたらと思いますが、横山市長いかがでしょうか。

**横山市長：**私の方は、子育てといいますか、安芸市は基幹産業が農業であり、施設園芸、特に茄子の生産が全国一位ですが、その中で茄子栽培、施設園芸にデジタル化、高知では、IOP（Internet of plants）を導入しており、これはクラウドで移住で農業をやりたいという方が来られたときに、そこへ入ると栽培の仕方がすぐにわかる。誰でも見えます。簡単という語弊がありますが、高知県で農業をやりたいと移住で来られた方が、IOPへ入ると、そのまま農業ができます。0から入っております。このIOPクラウドを高知県ではSAWACHIといい、高知県の郷土料理である皿鉢（さわち）料理を由来とするものです。この皿鉢料理というのは、1枚の大きなお皿の中に、寿司、天ぷら、唐揚げ、刺身が全部入っており、自由に好きなものを取って食べるという意味で、このSAWACHI、IOPクラウドは好きなデータを、会員の方が入って取り、自分の農業に役立てるものです。移住で来られた方が会員になれば、そこで農業ができるということで、コロナ前は結構農業をするために移住で来られた方がおりましたが、今はコロナになってから少し落ち着いておりますが、そういうことで特に若い世代です。子育て世代の方の移住が多かったので、環境、職業にもそういう環境で、デジタル化を導入しているという高知県の状況でございます。

**秋田さん：**ありがとうございます。やはり若い世代がここの町や市に住みたいということで、やはりそこに情報をアクセスするためのものをIOPで使われて、素晴らしいです。

文化の名前で SAWACHI という名前で、いろいろな形でアクセスをすることにより、その市に住みたいという関心を持ち、そしてそこに移住されるという形で、デジタルというものが子育て支援、あるいはその若い住民の増大に大きな影響を及ぼしているという話をいただくことができました。

いかがでしょうか。フロアの皆様の方からぜひこういう滅多にない機会でございますので、どちらのところにでも結構ですし、お二方にでも結構なのですが、こんなことの話聞いてみたいというような首長さまがいましたら、ぜひマイクを持ってまいりますので、お手を挙げていただけたらと思うのですが、いかがでしょうかありがたいです。最初に口火を切っていただきました。また次々と手が上がることを期待しております。ありがとうございます。

**質問者：**貴重なお話ありがとうございます。神奈川県葉山からまいりました、山梨と申します。まず奥町長にお伺いしたいのが、子育て施策が充実するためには、財源なり良いプラスアームがあるのだろーと思いますが、我々首長で、あそこの町がこれをやったと聞くと、うちもやらなきゃという気持ちになります。住民の方も議員の方もプレッシャーを与えてくるのですが、近隣の自治体の子育て出生率の動向や、同じような施策の動向について、もしお話をご存知でしたら、伺いたいと思います。

それから、横山市長には、なぜ婚活の方に着目されたのか、同じように子育て支援の施策に力を入れようという話があったと思いますが、私も実は子どもの生まれる数、全体的な出生率は減っていても、結婚している家庭から生まれる子どもの数は減っていないという統計資料を聞いたことがあり、そういった背景を横山さんはどこまでお考えで取り組まれたのか、また今後の展開等ございましたらぜひ伺わせてください。

**秋田さん：**ありがとうございます。それでは順に奥町長からよろしいでしょうか。

**奥町長：**まず、近隣の状況ですが、岡山県北は比較的高い出生率です。よその町の動向も気になりますが、うちは先ほど言いましたように、崖っぷちに立っているのもうこれにかけられないと思い、一つの特徴を作っています。隣の市が奈義町の我々の施策を真似をしてくださり、確かに出生率が上がるという言葉もいただきましたので、それは短期間か長期かはわかりませんが、そういう評価もいただいていると思っています。貴重な財源ですが、合併をしない選択のときに、行財政改革をやり、例えば、いろいろな委員さんに町が願いますが、その日当を1日5,000円から3,000円に減らしていただく、消防団の活動費を減らす、交通安全の会の活動費を減らさせていただいたりということで、町民皆さんが協力下さり約1億3,000万ぐらいの予算を作られました。そのお金を活用させていただいています。最終的には、お金の使い方なんで、さっきも言いましたが、崖っぷちに立っているのも、子育て支援にも重点的に使っていこうとして

います。いろいろな施策を考えるときに、まずこれが子育て支援になっているか、ひょっとしたら住みやすいという評価の中にちゃんと繋がっているかということを考えながら、施策を立てていこうと言っています。

**秋田さん：**どうもありがとうございます。同じ立場から、競い合いではなく、お隣でも、奈義町のおかげで出生率が増えたという、そういう連帯が生まれていくことは素晴らしいと思います。それでは横山市長お願いいたします。

**横山市長：**はい。なぜ取り組んだかということ、先ほどの説明の中でも安芸市の場合、婚姻数が大幅に減少しております。これがなぜかということで、アンケートを取りました。アンケートを取り、今でももう何十年もと言いますか、婚活などいろいろなことを、農業後継者の婚活、商業の方の婚活などそれぞれバラバラでやっておりましたが、なかなか成果が上がっていないということでアンケートを取ったところ、恥ずかしい、誰かに見られたら嫌、そういう婚活に行ったら、そういったアンケート結果もあり、それならば途中にいろいろ話がございましたが、そういう団体でお見合いみたいなことをするのではなく、昔の仲人さんではなく、世話好きな人で、そういう本当に募集ではなく人伝てに聞いて、世話をする人がいないかということから始まり、そこから先ほど説明したような、そういう団体でのそういう婚活ではなく、結婚を前提にするのではなく恋活です。

名前も恋活としておりますが、そういうところで友達感覚で参加しなさいと徐々に進化はしております。それとは別に、その中をお母さんの方で地道に、今年から2名体制にしましたが、2人おりますが、地道にそういう方と担当の方が、連絡を取り合ってください、徐々に成果は上がってきています。令和4年から開始したので、今年2名体制で今後どういう結果が出てくるかという、倍以上、この4ページの右側でございますが、成果としてそれぞれ上がってきており、ここの状況をもう少し充実といいますか、安定させていかなければならないかなと思っておりますし、その職員でのプロジェクトチームでは、先ほど18案が出たと言いましたが、そのうちのこれが一つですので、煮詰めていかななくてはならない部分があるのですが、次はこれが落ち着けば、次の事業へ入っていかなければならないと考えております。以上です。

**秋田さん：**ありがとうございます。従来のあの婚活とは少し工夫、二工夫された形で、これにもう少し自然な形で取り組んでくださった。ご質問いただきました葉山町長いかがでしょうか。何かございますか。はい、ありがとうございます。それでは他の方、ご質問いかがでしょうか。ありがとうございます。

**質問者：**新潟県見附市の稲田と申します。お二方のご説明本当にありがとうございました。両方にご質問したいと思うのですが、奈義町長さん、私は奈義町を視察させていた

だいており、本当にありがとうございます。そのとき一番頭に残っているのは、奈義のチャイルドホームです。本当どちらかというと、プロではなく、地域の方も一緒になって面倒を見ているということをお話させていただきましたが、これについて最近の状況や課題など、何かその辺もありましたらご紹介いただければと思います。よろしくお願いいたします。

それから、安芸市の方でございますが、やはり婚活支援は本当に大事だと思い、見附もいろいろと試行錯誤させていただいておりまして、ただ今、地域の世話焼き人というのはうちも制度があるのですが、これが全然成果がないため、これを見直すべく議論をしているところです。そんな中で今回、まさにコンシェルジュという話をお聞かせいただきました。このコンシェルジュは具体的にどの年齢層というか、具体的にどんな方が選ばれているのかというのが1点目と2点目は、4ページの5つほど、左側のピンク色の取組について、結構いろいろな取り組みされていますが、これはコンシェルジュ自身が考えられてるのか、それとも行政側がどんなサポートされてるのかというのが2点目と、最後3点目が、成果が結構得られているような感じですが、得られているポイント等もございましたら、お聞かせいただければと思います。よろしくお願いいたします。

秋田さん：見附市長様、ありがとうございます。それではまた奈義町の方からでよろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

奥町長：はい。課題はこども園ができて今年から運用しているのですが、給食費も無償にしています、綺麗なところで3歳からは英会話も子どもたちの耳が慣れる様にALTを3人入れており、そんな魅力もあってなののですが、家庭保育をしようかという人が、こども園に入れられるということで、ちょっと人数が少なくなっています。チャイルドホームは、今まで1、2、3歳までがほぼ中心だったのですが、3歳児が抜けて、0、1、2歳までが大部分ということになっています。人が少なくなると活力もだんだん落ちてくるということですが、今は父親を引っ張り出そうということで、いろいろな企画をしてくれていますし、自主保育という取り組みをしています。それは保育士さんと保護者が一緒に交代交代で子どもさんを預かって保育をするということです。自分の子どもを一对一で面倒をみると、ストレスが溜まります。教えたことができない。なんでうちの子はできないのかと、少しイラッとするのですが、よその子どもさんと一緒に保育をすると、どうやってやろうかと考えるので、そのストレスの溜まりようや発想が変わるので、これはなかなかいい施策だと思ってやっています。これは職員から挙がってきたことで、最後に反省会として、ビデオや写真で撮ったものを見ます。そうするとお母さん方が感動して泣きながら振り返るということがあり、本当は子育ては楽しいし感動的なんです。それを我々は忘れてるということで、その場面に行くと思い出させてもらいました。自主保育をやっているということです。

秋田さん：ありがとうございます。自主保育をすることにより、また子育ての楽しさということを保護者の方自身も、それからお父さんも巻き込んでというようなところを伺うことができました。3歳以上が無償化になり、どんどんこども園や、それから令和8年度からは、全国でこども誰でも通園制度の方を今こども家庭庁では検討しており、あの時間数とかいろいろな自治体の取組との併合をどうするかについて議論しておりますが、そういう中でもやはり自治体がこういった自主保育をやられるということで、保護者を支援されているという素晴らしい例だと伺っていて思いました。ありがとうございます。横山市長お願いいたします。

横山市長：まず安芸市にも現在、結婚相談員という方が各地区にあります。この結婚に向けてのサポーターみたいな形ですが、結婚という言葉は今回は使わず、出逢いコンシェルジュと。婚活ではなく、恋活と。そういう結婚という言葉を外して気軽にそれぞれ男女が遊びに行ったり、いろいろな懇親会をしたり、ゲームをしたりという、結婚前提ではなく気軽に参加できるということを前提にしたところでございます。

それから、コンシェルジュにつきまして、一応募集をしておりますが、私が直接面接をしていないので、わかりかねるのですが、大体募集をいたしまして、その中で面接した中で、それぞれ担当課で面談した方の話し方とかいろいろしていると思いますが、今現在の方は市内の方で、結構地理的に安芸市は面積が317平方kmあり、地区がかなり離れており、地域性、昔8つの町村が合併したので、海辺の地区と徳島県境側にも集落がありますが、それからまだ西や東にあり、それぞれ地域性が全く違うので、一定その地域性をわかってる方も一応希望としてはあったのですが、そういう方がちょうどおられまして、その方は各地域の方も知っていて、50代の方ですが、そこは本当にこういう人材が次また何人かいるわけではないですが、今現在は成功していると思っております。

それから、このそれぞれの事業につきまして、当然コンシェルジュの方と行政の担当課の方は、協議をした中で一緒に進めております。全てコンシェルジュ任せということではなく、担当課といいますか、所管課がまた一緒に行動もしているところでございます。

秋田さん：どうもありがとうございます。実は婚活というものがこども家庭庁で予算や評価などいろいろな事業のときに最も委員から意見が強く、反対意見も出るところであり、専門の研究者は、いやこれが一定の効果があるということを言われる委員と、それから本当に成果が上がっているのかエビデンスを追いかけないとといった意見や、ここまで自治体が介入するのはいいのかという意見が委員から出る論点の一つでもございます。



でも、そこはいろいろ横山市長の方では工夫を、安芸市の方ではされているというような姿が見えてくると思いました。見附市市長から貴重なご意見、ご質問ありがとうございます。あと1、2件かと思うのですがいかがでしょうか。お願いいたします。

**質問者：**千葉県の新崎町です。実は子育て支援を私どもの方もだいぶ見習わせていただきまして、いろいろな施策を打っています。本当に保育料も0歳から無料で、それから給食費も全額無料と。そしてまた医療費も18歳まで無料というようなこと、その他にもいろいろなお祝い金を出しながら、経営的な支援をいっぱいやっているわけです。

それプラスやはり先ほど出られました、横山さんが言ってるような、結婚をしていたくことがやはり一番早いと私どもは思っており、現実的に子どもを産まない人たちがいるのと、子どもを産む人たちが増えるのでは全然違うわけで、特にもう私のところもやはり40歳、50歳になっても結婚しない方がいらっしゃいます。そういう人を対象に今まで先ほど言われたような、結果相談員ということで、だいぶやってきました。10年以上20年ほどやってきたかと思います。相談員さんにお金を毎月支給しながらやったのですが、なかなか効果が出ない。そうすると逆にもう少し絞って、今東京の方から若い女性を呼んで、ここ2回ほどやってみたのですが、やはりなかなか難しい。そうするともっとこちら側の男性の年齢層を絞り、結婚適齢期といわれる男性、女性に何か焦点を当ててやるしかないと思っているのですが、先ほど言われたように、その相談員の制度があったときと比べて、今コンシェルジュになっていますが、私はそのお金を出しながらやったときに、だいぶ議員さんが突っ込まれて、成果が出てないのではないかなという、現実成果はでないです。今回コンシェルジュという形でやられていましたが、お金といたしますか、どういう支援というか、実際に支給をしているのか、あるいは使ったときに何らかの補償をするのかなど、その辺がよくわかりませんので、もしよければ教えていただけたらと思います。

**秋田さん：**ありがとうございます。横山市長の方でお願いいたします。

**横山市長：**実はこのコンシェルジュさんは、会計年度任用職員として、市の職員として雇用しています。結婚相談員さんは安芸市もそうでしたが、地域の年配の方に月何千円という、当時はそういう形でしておりましたが、今回はもう専属で会計年度任用職員さんとしてもこれに取りかかっていると思います。

**秋田さん：**どうもありがとうございます。いかがでしょうか。最後の質問になるかと思いますが、特になければ、お二方に最後に、もうあの時間の締めになっていますので、これだけは今後について伝えたい、今後の展望ということでそれぞれお話をいただけたらありがたく思います。また奈義町長からでよろしいでしょうか。お願いいたします。

**奥町長：**私の町は隣に10万人の津山市があり、総合的に考えると津山の方が住んでいて楽しいだろうと想像しますが、奈義町にしかないものをしっかり磨き、その一つは子育て支援と思っていますが、そういうものをしっかりさらに力を入れてやっていきたいと思っています。子育てが楽しくないといけません。子どもを産んで貧乏くじひいたということでしたら、2人目3人目は必ず生まれてきません。楽しく過ごしている親子連れがたくさん増えるように、お母さんの笑顔が増えるように、そして高齢者の皆さんが元気で生き生きと過ごしているのが我々の将来の目標なので、そんな町にしたいと思っています。

町に魅力をこれからもつけていきたいと思っていますので、またいろいろと皆さん方からも、視察に来ていただく、教えていただくなどをお願いしていますので、よろしくお願いします。

**秋田さん：**ありがとうございます。奈義町ならではの子育て支援のお話をいただきました。それでは横山市長お願いいたします。

**横山市長：**はい。私も奈義町へ再度お伺いし、いろいろ勉強させていただきたいと思いますが、子どもが安芸市の次の世代を担うということをやはり職員に徹底、十分わかっていると思いますが、なかなか業務をそこの一部の担当課しかそういった部分は考えていないのが現実で、やはり全庁的にこの少子化に対しては、取り組んでいかないと、それぞれの部署で何かしら子育てに関連があるので、そこを行政全体として、これから取り組んでいかなければならないと考えております。以上です。

**秋田さん：**どうもありがとうございます。行政全体で、その組織全体で子育てや少子化をどう克服していくのかを、一人ひとりの職員の人が自分ごととして知恵を出していただく職員の育成ということを図っているというお話を頂戴いたしました。今日は時間が限られておりましたが、貴重な各自治体の2事例、また3名の方から貴重なご質問をいただきましたことを感謝申し上げます、ちょうど時間になりますので、これで第1部の方は終わりにさせていただきたいと思います。この後20分後にはまた第2部でまた違う自治体からご提案がございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

お二人の市長、町長に拍手をもって終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

**司会者：**ありがとうございました。